

## 近未来金融システム創造プログラム第1回講義レポート

近未来金融システム創造プログラムの第3期が2019年4月23日に始まった。このプログラムは全15回にわたり、様々な講師陣が近い将来発生する確率の高い「近未来」の金融について講義を行い、受講生は理解を深めていくことが狙いである。

第1回の題名は「イントロダクション 実体経済と金融」。今回は株式会社ナウキャストの取締役会長を務め、本プログラムの統括責任者である赤井厚雄が登壇し、実際に日本とアメリカにおける実体経済と金融の比較をしながらその特徴と課題を論じた。

### 日本型金融システムの特徴と課題

日本の金融において代表的なプレイヤーは間接金融機関(銀行)である。そして銀行は、その資金調達手段の制約から、長期の資金仲介が苦手である。しかも、間接金融機関は規制の影響をもっとも受けやすい金融プレイヤーであるということが出来る。結果として、長期貸出に対する需要と金融機関による供給の間にミスマッチが起こってしまっていることが多い。加えて、リスクマネーの仲介も、日本の金融システムの大きな課題になっている。

続いて日米での住宅・生活の状況を比較すると、例えば高齢者の住宅・生活において、日本人の高齢者は半数が単身世帯であるが、アメリカは7割以上が単身世帯となっている。一方で娯楽に関しては圧倒的にアメリカ人高齢者の方がお金を使うのである。その理由として約2~3割のアメリカ人高齢者は年金以外にも運用による収益で生活しているが、日本人高齢者は預貯金と公的年金に過度に依存しており、運用のアクションを何もしていないといったことが考えられる。つまり家計のWealthをどうやってCapitalに変換するのかが日本の課題である。日本の金融システムに必要なのは複線的な資金媒介を可能にする仕組みである。

### 日本の金融はこんなに違う

アメリカではリーマンショック以前はクレジットリスクにレバレッジをかけていたことや、「マーケットの幻想」、「際限のない欲望」といったものが横行していた。リーマンショック後は実証されていないリスク分散や信用格付けモデルの限界が見えていき、規制が強化されることで投資銀行からファンド、金融アウトサイダーへと金融の担い手が変わる傾向がある。日本では民間資金活用の余地は大きく、その既存のシステムをディスラプトして、あるべき資金循環を作り出すことが重要になる。日本においては都市の国際競争力強化と地方創生の推進が必須であり、そのために必要な資金循環を作り出す分野で、今後のフィン

テックサービスの拡大が期待されている。クラウドファンディングが既存のシステムをディスラプトする可能性もある。

### おわりに

この講義を受けるに際して講師から「課題図書」と「推薦図書」が提示されるが、「課題図書」はあくまで講師の講義を受けるにあたっての最低限の知識水準を確保するためのものであり、「推薦図書」に関しては、今現在での講師陣の金融に対する思考を理解するためのものであることを理解したうえで講義に臨みたい。本プログラムを通じて受講生は目まぐるしく立ち代る社会の中で「自立して 2 本の足で立てるよう技術やノウハウを身に着ける」ことができるような人材になることが求められる。